

後置修飾の理解を促す指導法

The approach enhancing comprehension of sentences containing postmodification

山田 真衣
Mai Yamada

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：文法，英語教育，第二言語

Key words : Grammar, English education, Second language

1. 研究目的

金谷(2017)によると，中学校3年間で学んだ英文法の定着率は低い。高校生を対象に行った和文英訳テストの結果，過去分詞の後置修飾の正答率は全体で11.2%であり，上位校の高校生ですら25.0%であった。また，竹内ら(1988)は，文法の理解度と定着度を計る調査の結果から，中学生にとって現在分詞と過去分詞の後置修飾は最も難しい英文法項目のひとつであると述べている。

しかし，中学生で既習した英文法の定着率がこれほどまでに低いことは，今まであまり問題視されてこなかった。中学生にとって難しい英文法であっても中学校3年間で学ぶものは全て基礎であり，その基礎が定着していなければ，それ以降英語を発展的に学ぶことは不可能であると危惧する。

金谷(2017)と卯元(2009)は後置修飾の定着度を調査するために和文英訳テストを実施した。しかし，今までの研究で，英文和訳と和文英訳テストを同時に行っている研究はない。英文和訳と和文英訳テストを行うことにより，両テストにどれくらいの難易度の差があるかを調べることができる。本研究では，分詞の後置修飾は4タイプに分類する。(表1) 先行研究で実施している和文英訳テストでは，SPRとSPAを出題しているテストはあるが，OPRとOPAを同時に出題しているテストはない。本研究では，英文和訳と和文英訳テストの両方を行い，SPR，SPA，OPR，OPAの理解と定着の度合いを調査する。

平井(2017)は平成10年度改訂中学校学習指導要領に沿って作成された7社の中学英語教科書における現在分詞，過去分詞と関係節の登場順番と出現回数について調査した。この研究を基に，高校生の後置修飾の理解と定着の実態に基づいて，現

状に対する改善策のひとつとして教科書における現在分詞と過去分詞の後置修飾の配列の妥当性を検討し，それを現状に対する改善策のひとつとして提言したい。

本研究では後置修飾の中の現在分詞と過去分詞を研究対象とする。この研究を通して明らかにするのは以下の2点である。

- 1) 高校生対象に後置修飾の英文和訳テストと和文英訳テストを行い，理解度と定着度を明らかにする。
- 2) 中学校英語教科書における，後置修飾の登場順序を調べる。さらに，後置修飾の難易度と登場順序を照合することにより，教科書における後置修飾は生徒の理解度及び定着度状況に配慮した配列になっているかを検討する。

2. 研究実施内容

本研究は，以下の5点に沿って行う。

- ①後置修飾の理解と定着についての先行研究を行う。
- ②先行研究に基づいて改善した文法テストを作成する。その際，現在分詞と過去分詞の後置修飾は以下の4タイプに分類する。

Subject Present Participle (以下 SPR)	現在分詞が主節内主語を修飾している場合 The nurse <i>kissing the doctor</i> treats the patient.
Subject Past Participle (以下 SPA)	過去分詞が主節内主語を修飾している場合 The nurse <i>kissed by the doctor</i> treats the patient.
Object Present	現在分詞が主節内目的語を修飾している場合

Participle (以下 OPR)	飾している場合 The doctor treats the patient <i>kissing the nurse.</i>
Object Past Participle (以下 OPA)	過去分詞が主節内目的語を修飾している場合 The doctor treats the patient <i>kissed by the nurse.</i>

表1 分詞の後置修飾の4タイプ【Izumi(2003)】

- ③文法テストのパイロットテストを実施し、テスト問題の難易度と形式の妥当性を検証する。
- ④高校生を対象に文法テストを実施し、その結果から、理解度と定着度を明らかにする。
- ⑤中学校英語教科書における SPR、SPA、OPR、OPA の4タイプの登場順序を調べ、文法テストの結果と照合することにより、教科書における後置修飾は生徒の理解および定着を配慮した配列になっているかを検討する。

2. 1 先行研究のまとめ

これまでの研究で明らかにされていることは、以下の4点である。

- ①英語学力上位群と下位群の違いにかかわらず、また情意的要素を排除して考えても、現在分詞の後置修飾は過去分詞の後置修飾より正確な文を作りやすい。
- ②SPR は、SPA より正確な文を作りやすい。
- ③現在分詞の後置修飾の文は過去分詞の後置修飾の文より理解しやすい。
- ④平成10年度改訂学習指導要領に沿って作成された中学校英語教科書は、後置修飾の登場順序も出現回数も統一されていない。

2. 2 実験内容

SPR、SPA、OPR、OPA の4つのタイプの和文英訳テスト4問、英文和訳テスト4問、計8問を回答する。1問2点とし、16点満点の試験を実施した。試験時間は、和文英訳テスト7分、英文和訳テスト7分の計14分で、和文英訳の問題を回答後は、英文和訳の問題を再び回答することを禁止した。対象者は、私立A中学校に所属する高校1年生91名。調査時期は、2019年1月である。

2. 3 分析内容

平成20年度改訂中学校学習指導要領に沿

て作成された6社の中学校英語教科書を分詞の後置修飾にだけ着目し、SPR、OPR、SPA、OPA の4タイプの登場順序と出現回数を調査し、本研究で行った実験結果から判明した難易度と登場順序を照合し、教科書は生徒の理解および定着状況に配慮した配列になっているかを検証する。使用する教科書は、『TOTAL ENGLISH』(学校図書)、『COLUMBUS 21』(光村図書)、『SUNSHINE』(開隆堂)、『NEW CROWN』(三省堂)、『ONE WORLD』(教育出版)、『NEW HORIZON』(東京書籍)計6社の中学3年生の教科書である。分析範囲は、本文のみとする。

3. まとめと今後の課題

高校生を対象に英文和訳と和文英訳の文法テストを終えて、解答、分析をした。今後は、後置修飾の難易度と登場順序を照合し、教科書における後置修飾は生徒の理解度および定着度に配慮した配列になっているかを検討したい。

4. 引用・参考文献

- [1] Izumi, S. (2003). Processing difficulty in comprehension and production of relative clauses by learners of English as a second language. *Language Learning*, 53, 285-323
- [2] 卯元陽子. (2009). 「日本人英語学習者にとっての英語後置修飾構造の理解」. 『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』(6). 51-68. 大学英語教育学会中国・四国支部
- [3] 奥村耕一. (2017). 「中学生の後置修飾による名詞内部構造の意味解釈と早期の練習効果について」. 『関東甲信越英語教育学会誌』31, 99-112. 関東甲信越英語教育学会
- [4] 金谷憲. (2017). 『高校生は中学英語を使いこなせるのか?—基礎定着調査で見た高校生の英語力—』アルク
- [5] 平井愛. (2007). 「英語後置修飾構造の習得難易度と指導課程」. 神戸大学
- [6] 平井愛. (2017). 「大学生英語学習者による英語後置修飾構造の難易度」. 『共通教育研究紀要』(2). 1-13. 神戸学院大学共通教育センター